

「わが青春、移動大学」 (91・11・19)

川喜田 二郎(昭16・理甲)

「わが青春、移動大学」なんていう題を選んだわけは、他の会じゃ話もできないことを、同窓会だから本当の正直なところを遠慮なく言えるだろう、恥かいてもええわという気持ちです。それから、次に、自分の人生で、一番メチャな冒険したのはどういうことだったのか、これを話しようと思ったからです。それがたまたま移動大学ということになります。

今から二十数年前、私の関わった大学の世界では、大学紛争というのが全国的に荒れました。一番派手な時には、東大の安田講堂の上に立て籠つとる連中にヘリコプターでどうやらこうやらしたという話まであったわけですね。あの時は全国的に荒れましたね。当時、私は東京工業大学の教授をしてたんです。ところが、やっぱり東京工大もお付き合いのようにそういう紛争が起きました。それが切っかけで、癪に触るから、やろうと言うて考えたのが移動大学なんです。

それで、移動大学というのは、一体何をするのかということなんですけどね、これはテント張

りで二週間缶詰めになって、問題解決の勉強をしようという試みなんです。その募集する参加者（スタッフ以外）の定員が一〇八名なんです。つまり、煩惱の数と同じであり、除夜の鐘の数と同じでありました。何でそんな抹香臭いことを考えたのかと誤解されるかもしれませんが、そうじゃなくて、全く偶然そうなったんです。

ああいうふうな大学紛争でなぜもめるのかというと、結局のところ一つの原因は人間の協力の仕方が下手くそだということがあったんだと思います。それで、まず人間が協力する時に最少単位のチームの人数というのは、何人がよかろうか、と私は考えたのです。自分の経験では、六名プラスマイナス一名ぐらいかな、とこう思ったんです。だから、応募者を全国から募ったら、見ず知らずの人間がまず六人で一つの「チーム」というものをつくる。それで、チームワークを實際体験して勉強し合う。ところが、六人ぐらいのチームでうまくいっても、二段階のチームワークがうまくいくという保証は何もない。だから、もうちょっと難しくしてやろうと思って、六チーム集まって一「ユニット」という単位をつくったんです。そうすると、ユニットがいっぱいになった時には6×6、36人です。更に、もう一つむづかしくして、三段階までの人間の組織運営ができるかどうか、やってみい、という訳で、今度も又六単位じゃ多すぎるので、三ユニットで一キャンパスの定員にしたのです。そしたら6×6×3です。その時、非常に驚いたのは、なんとちよーど一〇八なんです。これぞ仏の御引き合わせじゃ、という訳で、定員は一〇八人以内

ということにきめたのです。そういうことで二週間缶詰でやろうというわけですね。

それで、見ず知らずの人間が一遍に集まったって、この通りちゃんとうまいこといくじやないかということを実践しないといかん。そういうアイデアでおっぱじめた訳なんです。御陰さんでこれがね、非常に具合がよかつたんです。その二週間、うまいこと仲良く人間が協力する秘訣は何であるのかというと、結論を今私は申します。

それは、ただ愉快にキャンプをやろうよ、では必ずもめるんです。ところが、集まって共通の課題のもとに生活をするとうまくいく。しかも、それだけでは十分ではなく、その共通の課題をどういう風に問題解決としてやるのが大切なんです。やっぱり、まともなやり方というものがあ、と私は考えていました。それをやったらよろしい。

こうして実施した結果、私は今こう思います。結局ね、「キャンプ生活を愉快に楽しめばいいんだ。」なんて屁理屈を言って集まってきた連中に限って、集まってそのうち、3日目ぐらいから荒れてくるんですね。一週間目ぐらいはね、惨憺たるものになってしまっんですね。ところが、問題解決のテーマを持ってますと、これはもうガタンとよくなる。これはおもしろいぞ、と思っただんですね。

という訳で、こういうやくざな事業を何で考え出したのかという正直なところをのべましょう。こういう同窓会だから、お断りします。自分の個人的なことも遠慮なしに言います。大体一つは

ね、私は京都の一中、三高、京大を通して、山岳部、登山仲間と親しかったんです。それでまあ、登山の方では一中、三高、京大、いずれも名門なんです。先輩に錚錚たる人がいましたね。今西錦司さんとか西堀栄三郎さんとか桑原武夫さんとかがいて、まあ言ったら名門だったわけですけど。それでそういう雰囲気呼吸しながら過ごしたんです。

だから大学へ行く時、何を専攻しようか、というとき、私はもう、直ちに地理学を選びました。地理学なら何でもどんな所でも行けるし。今でも地理学はまとまりの悪い学問なんですよ。講義の最初に学生を前において私が必ず言う言葉がある。地理学は何故地理学というか。それは散り散りばらばらなことをやるから地理学という。まあ、そんなことにはしておき、それで、そういう因縁から、野外に親しむ分野を選んだということになります。それから、今西さんのような先輩がね、登山と海外の探検が好きだったんです。その影響を受けて、私もいろいろ行動したんですね。そういうことが背景にはあったと自分では思っています。

例えば、大興安嶺。京大の学生時代の昭和17年には北満の大興安嶺縦断という學術探検を行なったわけですね。当時としては初めてですね、地図もなかった。それでやったわけです。私は学生だったから世間のことも何も知らなかった。やっぱりね、先立つものはお金ですね。やるっていったって、金をどうするねんということだね。その時に初めて金策の苦労を覚えました。結論からいいますとね、満州国の治安部という組織から予算とったんです。ところが、治安部なんて

いうのは傀儡で、実権は関東軍です。そこで関東軍の参謀のOKをとらなければいけない。京大のチンピラみたいな学生がね、新京の関東軍の門をくぐって掛け合いに行かんならん。これは、わしら知らん者にとっては辛かったですな。剣つき鉄砲を持った衛兵が「こらー」って言って気合い入れよるしね。いやらしかった。とにかく、そんなことでどうやらこうやら強引に関東軍のOKとそして治安部の予算で辛うじてやったわけです。

その時に、なんぼ予算つけてくれたかと言ったら、当時のお金ですな、千八百円です。なんぼ当時のお金やと言っても千八百円じゃね、大興安嶺の山の中へスタートして入った途端に、もう金は完全にゼロです。けれども、リーダーの今西さんというのは、悠然としていてね。曰く、「ええやないか。別に山の中に売店ないで。」それで山の中から出てきて北のアムール川に着いた時に、まさか我々を見殺しにはすまい。構わん、構わんと言うんです。そういうことで、なるほどと思っただんですね。

そういうこととかね、それから、その後、短期間ではありますが、一応陸軍の生活もしました。御承知のように軍隊の生活というのは、メチャバツかりの生活をやらすわけです。理屈に合ったようなことはあんまりやらさないのですな。新兵で入ったら靴を支給される。その寸法が私たちの足に合わない。「班長殿、こらあ私にはちよつと小さ過ぎます。」って言ったら、「ばかやろう。足の方を靴にあわしとけ。」といった具合です。だから、そういう柄の悪いやり方はどうしても

軍隊に居たら覚える。

そこで結局、言わば度胸がついたわけですね。物事をやる時に、理屈なんか少々通っていないくてもやった方が勝ちだと、今から言うと、悪い考えだけけど、それでよしよし分かったって訳です。ところがその後、縁があつて戦後は鳥取県の伯耆大山ほうきだいせんの原野で開拓地百姓をしばらくしてたわけです。それから、縁があつて東海大学の予科の教授になったのです。百姓から急に予科の教授になったのです。そんなことができた時代というのが、あの混乱期のおもしろさなんです。

さて、大学人としてのコースを歩いてみますとね、やっぱりおもしろくないことがでてくるんです。そうするとね、私が歩んだ地理学や、のちには民族学という領域ですと、いわゆる理科系というより文科系的ですね。大学の中で教育と言えば、教養的な勉強の方が多くなるんです。大学の教養の勉強というのは、つまらんです。やってもね、学生にはむなしんですよ、全くそれがわかるんです、こっちにね。だからね、かわいそうだなと思つたんです。

こんなことよりは何か本物の仕事をバンとやってみよう方がよっぽど教養になるらしい。前から私もこんなことをいろいろ考えてたから、「一人人間が問題解決をするとは何ぞや。」という根本から私は考えたんです。英語でも problem solving なんてこと言ってる。けれども、そんなこと言わんでもね、日本の庶民は昔から問題解決能力の重要性をよく分かつてた、と私は思つたんです。それはちゃんと庶民の言い方がある。どういふ言い方かと言いますとね、「ひと仕事やっ

てのける。」という言い方がある。

何かね、自分のやったことが、たまに上手くいくと気分がいいから、友達を飲み屋へ誘う。それで酒がまわってきた頃になると、友達の肩をたたいて曰わく、「やっぱりね、ひと仕事やってのけんとダメだなあ」なんてことを言ってるわけです。それだ、それだ、その言葉がいいんだという考えを私は抱いたんです。柄の悪いひと仕事はこつちもちよいちやりましたけどね、千差万別のひと仕事というものを本当に素直に、科学的に達成するまともなやり方というものがあるのではないかしらと、こう思い出したんです。

それで、いろんなことを試みました。私はまず最初に、自分が実際手掛けた仕事を数種類書きだしましてね。「この仕事をやってる時、途中でどんなやり方を採用したろう。」と、やたら沢山の紙キレに書き出したんです。そういうように、数種類の仕事について、採用したやり方を沢山メモしました。ついでその紙キレをがしゃがしゃ動かしているうちに結論が出たんです。それがまとまったら、「なるほどそうだ。」と判りました。仕事というものは、いろんな種類があり大小があるけれども、基本は同じだという結論ですな。同じだという結論をものすごく簡単に絞ってしまうと、こういうことなんです。要するに、それは判断・決断・執行だ。「判断」というのは、そのテーマについて分かるということなんです。分かった上で、やるべきかやめるべきか腹を決める。それが「決断」なんです。で、「やめた。」ということが大変立派な決断になることもある。「や

ろう。」という決断をしたら、次は手を下してやっつてのける、と。これは「執行」だ。こういう結論なんです、ところが、この判断・決断・執行がひと仕事になるということを発見してもね、こんな当り前のこと人に言うてもね、馬鹿にされるだけなんです。お前、今ごろ何言うてんねん。」ってなものでね。先輩なんかにちよつと言うのは恥かしい。先輩を捉まえてね、「つかぬ事を伺いますが、ひと仕事はどうしてやればいいもんでしょうか。」なんて言うたらね、先輩は目をパチクリさす。それからこつちをジーツと見て、「お前、ちよつと頭いかれてるんじゃないか。そんなことぐらいはね、大学にくるまでのどっかで覚えてるはずだ。」こう言うかもしれない。しかし、私はどうもそんな安易なこととは思わない。

で、要するに、判断・決断・執行、これはねえ、戦後の日本の企業でよく言う、「プラン・ドゥー・シー」とは全く違う。プラン・ドゥー・シーなんていうものは、執行の中の小分けにすぎないので。その前に「判断」と「決断」という大事な段階を忘れてるのところがいますか。結論で言いますとね、ひと仕事をやっつてのける中で、今までいちばんおろそかに放っておいたのは、「判断」なんです。どう判断したらいいのか。これがね、科学的にできあがってない、ということ。判断をするというのは、はっきり言ってしまうと、外から何とか情報を取り込むことなんです。取り込んで何とかまとめて結論を揉み出すと、それが判断。一言で言えば「わかる」ということだ。

で、判断するにはどうしたらいいかちゅうんで、KJ法というような方法も作り出した。そして凡人でもやれるということがわかってきた。ただし「しっかり修業はせないかんで。」ということなんですがね。結局、これをやると達成する能力が高まるんです。トンネルで言うと、一ヶ所不通だった箇所が、幅が広がったみたいなものだから誰でも達成しやすくなる。

そうすると、達成体験を誰もが増やすことができる。そもそもそれ以前から、私は「達成体験」ちゅうものの重要性をしみじみと感じていました。うまくいった時は、誰でも気分がいい。ビールでも飲むうやないか、とこういうことです。自信がつくのはもちろん、そのほかに非常に重要なことはね、一緒に達成した仲間というのは、これは非常に深い連帯意識を抱くのですね。だから、子供のガキの頃から大人になるまでに、子供の遊びとは言いながらね、一緒になって物事を達成した仲間は、非常に深く結ばれてるわけです。もちろん、逆に言えば達成し損ねて彼女にふられた街は、二度と訪れたくないということになるわけだけでも。

そこで「よし、わかった。要するに達成体験というものをしみじみと感じさせるようにするには、まず判断力を強化することだ。その方法を編みだし、自ら技術的に実践してみる。」こういう考えなんです。で、そのためにKJ法という方法を開発して、それがやっときき、研修の大筋までできたのが一九六七年です。

その時を境に、日本の企業界でぐっとKJ法に対するニーズが高まったわけです。そこで私は

その研修の先頭に立って無数の研修を企業その他の組織や個人に対してサービスしたのです。その体験を通して、私はいろんなことを学んだのです。その一つが、今言いましたように人間はやっぱり達成体験を通じて本人も意欲的に勉強する。それから連帯も強まるということです。

そこへもってきて、大学紛争が起こったわけですね。東京工大でも突然起こったんです。学生運動家の中に策謀家がいましてね、そういう連中が団交（団体交渉の略）というのを組んだり、いろんな策を講じるわけです。正直言ってみるとね、団交、そういう運動家がやる手口にもすごく腹が立った。何に一番腹が立ったんかと言うとね、彼らのやり方の冷酷なばかりの計算ですよ。これに腹が立った。ハートがあるのかということですね。計算で全部かたづけられる。そういう運動家は極少数であって、大部分の学生が東京工大で、千名以上の奴が踊らされているんです。大部分の学生いうたら可哀想なものでね。上層の運動家に操られる操り人形。三日二晩中、団交に腹が立ったもんだから、団交荒らしをしてやりました。いろいろあったけどね、敵が三百人居て、こっちが一人でもね、一人の方が却って有利ですわ。まあ、そういうことがあった。これで私はつくづく腹が立ってたんですわ。何に腹立ってたかと言うと、二つ腹立ってたことがあるんです。一つは今の運動家ちゅうもの冷たい計算ちゅうのに。この人間味の無さに腹立ってた。もう一つは何かちゅうと、大学教師のガラカンぶりに腹が立ってた。こんな連中と付き合ってみてね、心の中なんかできるかい、という気がしたんだ。

それで、これ以上やってもしょうがない。そこで、考えたんですな。要するに、教養とか、教育とか言うているが、一番大事なことは、ひと仕事を達成する能力を作るちゆうことやないかというのが私の結論です。そこで、そのことから考えまして、移動大学ちゆうのをやろうということを考えました。

但し、これを考えて、「そのために、俺は東京工大の教授なんか辞めるぞ。」って女房には予告しといたんですがね。ところが、如何程本気で言っても女房の方から言うと、まさか本気でやるとは思ってない。そんなことを本気でやったって言うんで、後で苦情言われました。「あんたみたいない人はおらん。」てね。「先のことを何にも考えずメチャクチャやって」こう言われちゃったんです。

で、この時に私はどうしたかというと、有志の学生、大学院生とか若い助手とかを数名集めましてね。まず数名で移動大学ちゆうのを打ち上げる準備を考えた。

そのために、私はまず、自分で問題解決の方法ちゆうのを実践せないかんって他人から言われた。しかし実は、自分だけでなく、仲間も加えて実践してみなければダメだと考えていたのですよ。それで取り上げたのが、「大学紛争というものをワーワー騒いでやっとるわ。しかし、これの一番のポイントは何か。」ということ、「本質は何か」ということ、それを見抜かずに物事をやったら、間違っうんだということなんです。で、そのため、あの八王子の大学セミナーハウスちゆう

うのに仲間と共に泊まり込んで、いろいろ本質の追究をやった。その時にはKJ法を使いました。結論は何かというと、大学紛争の本質は、現代の三つの公害、これに対する大学生たちの反応だ。三つの公害というのは何じやと言ったらね、一つが環境に関する公害。こらまあ、今日、環境問題で有名だから誰でも知つとる。もう一つが何か言うたら、精神公害。人の心が荒廃する、というのやね。これも人間が自ら作り出したんやから、一種の公害や、ちゅうわけ。第三は、何か言う組織公害。今日もまた会社へ行かんならんとか役所へ行かんならんとか、うつとしい顔をして出掛けるあの悲しさね。そういう所で、人間性がいじめられとる。その間に組織が動脈硬化する。こらまあ、組織公害や。この三つの公害が折り重なってやってきた。これで、どうしたらいいかっていうんで、サラリーマンはストライキをおこす。学生の場合には大学紛争。他はまた違う騒ぎ方をするかもしらん、というような結論。

それで、じゃ、どうしたらいいのか、その時出た解答はね、「参画社会」を作れちゅうことね。これは、管理社会の逆用語で、私が創りだした言葉です。管理社会というのは、組織の中で上から下への情報の流ればかりがやっぱり強くなるんですな。下から上ちゅうのはね、どっちかというと弱いんです。それでは生命の実相に背くという考えですな。ボトムアップの情報処理がトツプダウンとつり合うぐらいになった状態が理想なのであって、それを実現できるような社会が参画社会である。

そんな大きなこと、現代文明の夢を論じるのも結構やけど、具体的にきて、我々はどうするべきか。我々数名でもできる範囲で、できるだけこの理想に近いことをやろうやないか。それが今の移動大学で実行することになったわけです。

それにしても、先立つものは金だ、という訳ですな。ところが、こういう考えに共感してくれる経営コンサルタント会社の経営者（森川宗弘氏）がいましたね、その人たちが大いに共感してくれて、資金はなんとか自分の方で応援しようということになったわけです。その人の親分みたいなのが、かつて電通のボスだった島崎千里さんという人でね、もう亡くなったんです。この人がなかなか男気のある人で、第一回のやる時の金はなんとかしようと言ってくれたんです。

まあ、それはいいけども、一体いつやるのか、ということになった。時は、一九六九年です。その時に、私のいた東京工大で機動隊が学内に導入される、というニュースが入った。私はもうこの時期しかないと思ったんで、直ちに自分の辞表をまず大学に出して、次に新聞記者会見をやる、そうして急げということにしたんですね。なぜ急がないかかんかと言うたら、その当時の状況で夏休みのうちに旗挙げしないと夏休みを過ぎたらチャンスを失するということです。こうなったらね、私は初めてその時、大げさのようだけど、明智光秀が旗挙げする前の気持ちがあった。そうすると、八月三十一日で夏休みが終わる学校が多いですからね。東京工大は九月十日だったけど。そこで、「よし、八月二十九日に発足できるように準備せよ。」という訳ですな。

そんなことを言うてもまだ大ざっぱな金のあれだけです。そこで、私の所で助手をした君が、きつい事言うたものです。「先生みたいな無茶な人知らんわ。金を集めてからやったらええのに。」とこう言うたんです。で、私が、「何や。君ね、金が集まってるから事業やるもんと違うで。事業やることによって金が集まってくるのや。そうでないといかんのや。」そんなことを言うて、もう減茶苦茶にやっただけです。こうなったらもう強引ですよ。理屈合わんでもやっただけ、ちゆうことですか。

そこでまあ、始めたんだけど、その時には、まだほんのわずか数名のスタッフがいただけ。しかもその中に学生が多かったから、それぞれ卒論を書かんならん、とかなんだかねとね、書いてる訳です。即刻動けたのは一人だけでした。今、トヨタに入って活動してる岡部聡君という若い学生でした。現役を卒業する少し前ですからね、これが一人でねえ、私の意を受けて覚悟してくれた。一人でこれだけの事やるんかと思っただけ驚いたんです。だってね、新聞記者会見で「やるぞ」と社会に宣言したのは七月十一日。八月二十九日にはもう開催に漕ぎつけたんです。これだけの短い間にどないしたと言ったらね、テントから携帯ベッドから鍋釜から文房具に至るまで全部揃えて間に合いませんですから、これはもう気違い沙汰なんですわ。その上に、勉強のカリキュラムから講師の人選まで。それをやりよった。今でも私はどうして間に合ったんだろうと思えます。

問題解決というと、御存知の方も多いかもかもしれませんが、作業手順のパート（PERT）という手法がありますね。それを変形したようなやり方をKJ法の一つの応用としてやっておりますが、「この仕事が済んだらこれ」というのね。それで済んだら斜線をシャツと引いて行く訳ですね。パートという作業手順を作るこの方法が絶大な威力を発揮しましてね。そのおかげで、そのうちに手のすいた顔ぶれが一人二人三人と付け加わって勢いが出てきた。そういう調子で皆頑張ったんです。

東京の拠点から、八月二十九日の朝参加者をバスに乗って開催地の信州へ向ったんです。信州は黒姫高原という所で開いたんですね。その開拓地の傍の藪を切ってそこをキャンパスにした。ところがそこへようやく辿り着くまでパートは出来ておったんですが、ついに力尽きて、着いてからどうするのか、出来てなかったんです。

だから着いた途端にどうしていいか分からなくなりました。しょうがないから、私は床几の上でんと腰掛けてね、動かないことにしました。皆が動いてる時ちゅうのは、どこかに動かない中心点が必要なんです。だから、その役割してるだけなんです。

幸いに、どうにか移動大学の二週間のプログラムが動き出したんです。そして、力余ってき一週間目になったらね、テントでバーを開設したんだ。そこで黒姫というのをもちって、「バー・ブラック・プリンセス」というのを開いてね。そして、バーが大繁盛。近所の開拓地の

人たちも飲みにきまして、地元との交流は満点でした。

私らの二週間ちゅうのはね、移動大学では酒類は少しも禁じてないんです。だいたいここで勉強すること自体が猛烈ですから、それ以外のことは、できるだけ自由にリラックスしろという方針だったんです。人間なんてね、どこもふさがれてしまったらね、気が狂いますから、大事なことだけ頑張つて、あとは全部自由にしろという方針。ところが参加者ちゅうのはやっぱりね、反体制じみたことを言ったりして行くせに、案外気が小さいんですよ。移動大学がきつと酒を禁じるだろうと思つてね。

あるテントの連中は酒が飲みたかった。ところがね、チームのメンバーの一人の誕生日なので、仲間の一人が、酒を買いに行こうというんだけど、「見つからんように」とか言つてね、ふもとの方ね、柏原かどつか、一茶の生まれた町までね、酒を内緒で買いに行った。やつとの思いで酒を持って来て、「さあ、これからみんなで飲もう。」と言つたときに、変な噂が流れてきてね。移動大学では酒なんて飲んだらいかんなんて規則、全然ないんだという噂が流れてきて、「これはしまった。」ということがあつたんです。

でまあ、とにかくもう一つエピソードみたいなことを言っておきます。それは、この移動大学を開く時に、やっぱりね、いやだけど私はスローガンを作らないかと、八つばかりスローガンを作つた。頭をひねって作つたんです。ところが、七つまでは尤もらしいスローガンが出来たん

だけど、どうしても最後にもう一つ何かが抜けておると感じたんです。だが言葉が浮かばない。最後にやっと作ったスローガンだけは変わってね。「雲と水と」ちゅうスローガンです。「と」を抜くと「雲水」ちゅうことになります。そういうスローガンを作ったもんだから一緒に協力してくれたある大学の先生が曰く、「あれはひどいスローガン作ったもんだ」と言うんですね。ところがおもしろいことに、参加した学生たちの意見を聞いたらね、七つまではいけ好かんスローガンだったが八つ目に「雲と水と」ちゅうスローガンがあつたんで、ついふらふら来た、というのがだいぶおるんです。結論は成功。今でも人気あるんです。「雲と水と」。まあ、そういうことがあります。

で、結局、やってみて言えることは、チームという単位ね、六名、これは仕事のできる集団としてもものすごく強くなりましたね。心も一致して。ところがもう一段上がってね、ユニットになるとこれがなかなかできない。ムード的には最初の頃から一体化した。しかし、理性的に仕事のチームワークのできる集団にまでは、なかなかできなかったんです。これはその後、何回か移動大学で繰り返して、十回目ぐらいの移動大学でやっとできるようになった。やっぱりチームワークが二段、三段になると難しいもんだということが一つありますね。

ムード的にならばね、第一回の黒姫移動大学ですでに成功した。ものすごく盛り上がりました。それで、結局、その時参加した連中は今でも、特に親しいです。がね、今でも彼らがいいう通り、

黒姫移動大学は二度と来ない。思えば我々の人生もはっきり言えば、まあそうなんだ。しかし、しみじみと思うかどうかの深さでしょう。彼女が見つかった日なんか二度と来ないちゅうのと同じこと。

それともう一つはね、その時のメンバーが言うんです。黒姫で我々が摺んだものは、一体何だったんだろうということを繰り返すんですね。それはね、わかるはずがないって言うてあるんです。いかほど理屈が通ったとしてもわからん。それは何かと言うとね、やっぱり創造的活動ちゅうものを通してね、ある不思議な生命を獲得した。生命なんていうものは、合理的なものじゃないからね、考えてもわかるはずないよ。そんなような感じだね。

それでもまあ、移動大学は今までに約二十回近くやったかな。お金もないし、制度的によく確立してなかったから、その後、十二年間、ブランクができました。ところが、おと年、もう一回どうしてもやりたいということを若い連中が言い出した。このようにして、また最近、移動大学熱が上がってきました。そこで最後は丹後半島の付け根の網野町ちゅうんでね、おと年やりました。それまでは、あちこち布団袋担いで、スリーピングバッグ担いで、北は北海道の十勝から南は本土復帰前の沖繩まで、いわば日本列島遍歴みたいな、そんなような状況でした。だいたいしゃべり過ぎましたのでこの辺でやめましょう。